

# PHAYAO レポート 2017-03 (徳島大学・山口県立大学)

(2017.9.1~2017.9.7)

## 元気をいただいたモン族の人たち

徳島大学 総合科学部 1年 正司亜紀子

9月4日から6日までの3日間、モン族の村、ホイプム村でホームステイをした。モン族とは、ラオス、ベトナム、タイ、そして、中国南部などの山岳地帯に住む少数民族である。

ホイプム村は、凸凹の山道を車で約30分登ったところにある。正直、そんなところで生活が可能なのか、コミュニケーションをはかれることができるのか疑問であった。しかし、いざ着くと、元気いっぱいにもかえてくれて、そんな不安は一気になくなった。確かに、言葉は通じず戸惑うこともあったが彼ら、彼女らの笑顔、親切な振る舞いで一安心した。

最初に訪れたのは、農業センターである。そこには、マンゴーやラムヤイなどタイ全土にある31種類もの果物が植えられている。しかし、シャンティ山口の佐伯さんによるとこの村のほとんども、遺伝子組み換えトウモロコシをたくさん植えていたという。森林伐採による飲料水源の枯渇、育成の過程で多くの農薬の散布による環境汚染と、健康障害さらには、地力の低下などの状況から遺伝子組換えトウモロコシから果実に変えたのだ。すると、将来性も見えて来て若者が定住し始め、今では、47から68世帯に増えたそうだ。健康被害を受けても止める人がいなければ、今もまだ苦しんでいたろうし、こんなに明るく私たちを迎え入れてくれなかったらろう。シャンティ山口をはじめとした、たくさんの人たちに守られて今のホイプム村が成り立っているんだと実感した。

農業センターでは、この村で最適な品種の選択と病害虫などについての勉強の場となっているらしく、彼ら自らが学ぶことで自立して生活できるようサポートをしている。

食事は、自分たちで作ったお米、タケノコ、野菜、猪のお肉などとても豪華で美味しかった。日本では、女の人が料理をするが、女も男も関係なくみんな準備しているのが印象に残っている。

お仕事は、時期もあると思うが、やる時とやらない時の区別をはっきりしていると思った。ある日は、朝の9時から夕方5時まで途中雨が降っても辞めず、収穫した生姜の荷詰めをして、ある日は、近隣の人と昼までお話しして、お昼寝して終わりの日もあった。

また、山岳地帯ということもあって、電柱はない。なので、冷蔵庫、扇風機などはない。日本では、暑かったら、クーラーをつけ、アイスクリームを食べるが、それができないのだ。当たり前だった生活が、ホイプム村に来て、覆された。しかし、なぜかそれが苦ではなかった。彼らは、自分たちが生活できるだけのものがあれば十分だと考えているし、それ以上望んでいない。だから、お仕事も、必要以上には働かず、のんびり暮らしていると考えられる。毎日、他者と比較し、自分を苦しめながら生活する

より、何倍も楽に生活できると思うし、実際楽であった。

2日目の夜には、交流会を設けてくれて、村全員が集まり、作った料理を食べながら、日本とモン族の文化交流をした。彼らは、伝統的なモン族の踊り、私たち学生は、阿波踊りと歌を披露した。確かに、言葉は通じない。しかし、みんなで踊りに参加することで、心が通じ合えたと思う。

3日間という短い間であったが、私は、本当にこのホームステイに参加できてよかった。環境はいいとは言えないけど、その中で、一生懸命生きているし、何より自分たちが満足して楽しんでいるのが伝わって来た。そして、本当の幸せとは、不自由なくなんでもあることではなく、現状に満足して感謝して生きることかもしれないとモン族の人たちを見ていて思わされた。これから、日本で生活していくが、この3日間で感じたことを大切にして、どんな形になるかわからないが、この経験を生かしていきたい。

最後になりましたが、貴重な経験をさせていただいたシャンティ山口のみなさん、モン族のみなさんほんとうにありがとうございました。皆さんと過ごした3日間、本当に濃く、楽しかったです。これからも、お体にお気をつけて頑張ってください。



ホストファミリーと私



皆さんとお別れのショット

## シャンティ山口スタディーツアー

### ～場所は違えど同じ人間～

山口県立大学大学院 国際文化学研究科

栗栖尚太郎

私は以前から、シャンティ山口のスタディーツアーがあることはゼミの先生などから聞いたため知っていた。興味がないことはなかったのだが、挑戦を躊躇う性格もあり、学部生時代に参加することはなかった。しかし、大学院に進学し、自分の研究が少数民族と関係するということもあり、今回参加するに至ったのだ。初めは、ゼミの先生と大学院の同級生と参加予定だったが、一人減り二人減り、気が付くと山口県立大学からは私一人での参加になってしまっていた。

しかし、シャンティ山口の佐伯さんの講義を受けたり事務所で話を聞かせていただいたりしたこともあったため、それほど心配もないまま出発日を迎えることができた。海外に行くこと自体人生二度目で、正直、ツアー内容を伝えると家族や友人には心配されたが、私自身はそれほど心配していなかったのが不思議である。

ツアーの前に、一緒にツアーに参加する徳島大学の学生たちと、チェンライの大学での発表があったため、チェンライで三泊し、その後佐伯さんと合流したのちツアー開始となった。

まずは、シャンティ寮での寮生との生活が始まる。初めはお互い言葉がわからないのと恥ずかしさとが相まって、無言の時間が続いたのだが、少しして部屋に集まっている時に同じ部屋の寮生が、「彼女はいるの?」と片言の英語で尋ねてきた。「一言目がそれかよ!」とも思ったが、同時に「日本の同年代の子たちと一緒にだな。」とも思った。遊びやスポーツで本気で盛り上がったり、カメラを向けると恥ずかしがったり、そう感じる場面は多々あった。



同部屋の寮生たち

また、「時間がないのに、学校の成績が良い。」ということを知っていたのだが、寮に貼ってある一日のスケジュールを見て納得した。

朝から晩まで細かく区切られたスケジュールの中に、勉強のために設けられた時間はない。これは彼らが、学校での授業を真面目に受け、夜の少ない自由時間や消灯後に努力をしているということがわかる。皆私より年下だが、上記以外にも自分たちのことは自分たちですることが徹底されている彼らから学ばさせられることは多々あった。

そんな彼らとは、バス旅行や釣り、田植え、スポーツ、交流会など、一緒に行う活動が増えれば増えるほど仲良くなれた。短い間ではあったが、彼らとの別れを惜しみつつ、

多少舗装されているとはいえハイラックスも辛そうな山道を行き、私たちはホイプム村に到着した。到着後、それぞれのホームステイ先の家の方が迎えに来てくださり、家へと向かう。少し歩くと、周り

の家と比べると明らかに現代風な作りの家があり、「すごい雰囲気の違いもあるものだな。」と思っていると、そこが私のホームステイ先であった。ごく少数の人にわかりやすい例を挙げると、ドラゴンボールで初めに悟空が住む山にカメハウスがある感じである。

そんな私のホームステイ先は、食料などを販売する小さな店も兼ねているということがわかり、すぐにその異彩に納得ができた。店兼息子さんたちの部屋であるその家とは別に、お父さんお母さんが住む家もあり、食事の際は移動してそこで食べる。そちらの家は、村の雰囲気に合っているというと語弊があるかもしれないが、村でも多数派な作りであった。

食事に関しては、私はほとんどのものに香草が使っているタイ料理があまり得意ではなかったのだが、村での食事は日本の味付けに近く感じてとても美味しかった。

村でもやはり言葉はほぼ通じないため、ジェスチャーや簡単な英単語でなんとか意思疎通を図るのだが、どうしても無言の時間が多くなる。そんな時に、私たちの通訳のような役割を果たしてくれたのが赤ちゃんだ。まだ一人で立つこともできない赤ちゃんは、もちろん大人たち以上に言葉は通じないため、実際の通訳にはならない。しかし、赤ちゃんと遊ぶことで、自然に大人たちとコミュニケーションをとることも増えたのだ。赤ちゃんのおかげで、ホームステイ先の方々とコミュニケーションをとる機会が増えたと言っても過言ではない。私のホームステイ先の赤ちゃんだけかもしれないが、「いないいないばあ」はタイの少数民族の赤ちゃんにもウケた。もう少し大きい子どもへの接し方に関しても、日本と同じような接し方で楽しんでくれることもわかった。初日に保育園を訪問した時には笑顔すらもほとんど見せてくれなかった子たちが、日本の子どもたちと遊ぶように遊んでいるうちに次第に慣れだし、最後の交流会では膝の上に座ってきたり、しきりにちょっかいをかけてきたりするほどにまでなれた。



ホームステイ先

日本と変わらないと感じたのはそれだけでなく、ホームステイ先のお母さんもそうであった。自分が庭で写真を撮っているとおやつ代わりにバナナを持ってきてくれたり、私のカメラに亀のお守りをつけてくれたり、口数は一番少ないが私のことを一番気にしてくれているのがわかった。日本で同じように私に気を使ってくれる祖母と重なる部分が多かったのだ。

村での生活は、天気の悪さもあり、農作業をしなかったことで、より村の日常を感じることはできたのではないと思う。先に述べたように農作業がないため、午前中から近所の人たちで集まり、女性は話しながら刺繍をし、男性は話したり軍鶏を闘わせたりする。一見なんでもないように思えるが、実際その場にいると、その素晴らしさに気付くことができた。日本人のように「今何時？」としきりに時間を気にしたり、「〇時〇分になったら～しないといけない。」と、分刻みのスケジュールに追われていたりする人は一人もいない。あらゆる環境が整い、便利になっているのは間違いない今の日本だが、常に何かに追われていることが充実しているとは言えないのかもしれない私は感じた。

また、私たちの祖父祖母の世代の人が、「最近の人は携帯やゲームばかりして」と言う理由も、村で

の生活でわかった。今の日本では、少しでも時間があるとすぐにスマートフォンを取り出し、子どもたちは学校から家に帰るとゲームをする。それらは今の日本では必要不可欠になっていることかもしれないが、スマホを肌身離さず持っていないくても、暇さえあればゲームをしなくても、十分充実するということがわかったのだ。寧ろ今の充実しすぎた時代だからこそ、ホイプム村のように近所の人と集まり話したり子どもたちと遊んだりすることに時間を費やすことが大切なのではないだろうか。

上記のような、日本では気付くことができなかつたことを身に染みて感じているうちに最終日を迎え、私たちは村の人たちに見送られながら、村をあとにした。

そこから、シャンティ山口の事務所に行き、そこで私は徳島大学の学生たちと別れ事務所での生活に移った。事務所での生活期間は、別の村を見に連れて行ってもらったり、私の研究でもある刺繍のものを売っている店に連れて行ってもらった。ツアーに加えて事務所での宿泊など、シャンティ山口佐伯さんのご厚意には大変感謝している。ツアーとは関係ないのだが、特記事項だと感じるほど、事務所で佐伯さんに作っていただいた食事が美味しかったこともここで述べておく。

約十日間と出発前はかなり長いだろうと思っていた今回のタイでの生活は、あっという間に終わった。長いようで短かった今回の寮での生活や村での生活、今回のツアーで総じて一番感じたことは、副題にも示した通り、「場所は違えど同じ人間」だということである。

寮生たちは、生まれも育ちも日本人とは全く違うにも関わらず、同年代の日本の学生となんら変わらない。村の人々も、「日本人と違う。」と思うことは一度もなく、言葉が通じないという点以外は、日本の村にホームステイするのと変わらないほどに感じた。

日本にいて、インターネットやテレビから得る情報だけでは絶対に気付けなかつたことに、今回ツアーに参加し実際に体験することで気付けたと感じている。

シャンティ山口佐伯さんをはじめ、今回のツアーでお世話になった全ての方々に、感謝しております。ありがとうございました。



村の方々と

—栗栖尚太郎—